

温暖化と二酸化炭素の嘘がノバシる日

去年は、博物館の講堂で情報提供をした。今年はパネルをじっくりと御覧頂いた。

嘘つきゴアが金にあかせて大嘘の映画を作り上げ、嘘を非難されることもなく、ノーベル平和賞などという欺瞞に満ちたものを獲得した。マスコミも嘘をふりまくのに忙しく、本当の環境問題にはまったく触れなくなった。カルト教団のマインドコントロールに恐怖したばかりなのに、こんな大嘘を信じようというのだろうか。熱狂する快感に身をゆだねてはいけない。何かせわしくなく、動き回ればいいことのように思って、結局は何か得体の知れないものに飲み込まれていってしまう、カルトにはまった若者たちを、私たちは責めることができるのだろうか？

冷静に、じっくりと、納得のいくまで考え抜いて、それから言葉を発し、行動したいものである。

『生活の中に科学を！』と、いまこそ声を大にして訴えたい。だますための科学など、私たちの生活に無関係なものであることを知り、本当の筋道立った思考を身につけたい。

反証あってこそ科学

疑似科学との違いは「科学的態度」

「疑似科学」とは、科学的態度を欠いた科学の模倣品である。科学的態度とは、仮説を立て、それを検証し、その結果から新たな仮説を立てるという過程を繰り返すことである。疑似科学は、科学的態度を欠き、単に「科学的」という言葉を使っただけの偽科学である。

取捨選択

さて、気象予報士も科学者たちも、静かに意思表示を始めた。熱狂し騒ぎ立てる喧しさの中で「真実を知る目を曇らせておこうという悪意に満ちた大嘘」が、静かに暴かれつつある。私たちも目を覚ましていくべきだろう。寒冷化は人類に致命的な打撃となる。狭くなる農業適地に対応して、人口の抑制こそが急がれることなのである。

水に『ありがとう』できれいな結晶に

教室に「ニセ科学」

「教室にニセ科学」という本は、著者の長年、教室で目撃してきた「ニセ科学」の事例を、生々しく描き出している。著者は、教室で目撃した「ニセ科学」の事例を、生々しく描き出している。著者は、教室で目撃した「ニセ科学」の事例を、生々しく描き出している。

疑問感に拡大

「教室にニセ科学」は、著者の長年、教室で目撃してきた「ニセ科学」の事例を、生々しく描き出している。著者は、教室で目撃した「ニセ科学」の事例を、生々しく描き出している。

温暖化の「異説」相次ぐ

「地球は近く寒冷化する可能性がある」という「温暖化は二酸化炭素(CO₂)の増加ではなく自然変動で説明できる」という異説が次々に披露された。

日本地球惑星科学大会

温暖化をテーマにした関連シンポジウム(5月27日、千葉)

「CO₂主因ではない」「寒冷化の可能性」指摘

温暖化の「異説」相次ぐ

今回のパネル展では、『教室にニセ科学』を第一テーマとした。『水からの伝言』というオカルトが学校に忍び込んでいる、危機的状况をお知らせしたかった。『科学』への正しい姿勢も学んでほしかった。根は、二酸化炭素も同様だからであ

二酸化炭素説への否定が科学者の中からもはっきりと出てきたことは、大変喜ばしいことである。これまでは、あまりにヒステリックな声にかき消されて、冷静な科学的検証や発言は一切否定されてきたのだから。

しかし、注意が必要だ。この二酸化炭素の嘘を暴くのは当然としても、そこに全く別な、政治的

に危険な思想をもぐりこませようという勢力が台頭している。つまり、**環境問題を口にする**こと**自体を葬り去ろうという勢力**である。「二酸化炭素などという嘘をふりまいたのは『環境派』という嘘つき集団だ、奴らを社会から葬り去れ！」というキャンペーンを張る準備を着々と進めている。



私たちは、『国策として経済発展を至上命題としてきたこと』が、公害の真の原因であることを知っている。いま、にわかに出てきた二酸化炭素説否定の論調は、国家の発展に邪魔だから、というものである。人間の尊厳と生活を取り戻そうという活動とは、まったく逆である。昔から本当の環境問題を訴えてきた榎田敦のような学者と、こうした後出しの国家主義者たちを混同してはならない。環境の立場からリサイクルや二酸化炭素説に以前から異議を唱えていたのは、榎田敦である。後からのこのこ出てきて反環境の経済至上主義へと捻じ曲げていこうとする、恥知らずな後発の論調には警戒が必要である。

二酸化炭素説を否定する論者の背景を、しっかりと見きわめていきたい。核開発の中枢にいたり、経済発展を最大の関心事にしていたり、環境問題に取り組む人を危険思想の人間とみなして攻撃したり、科学者なのに科学的事実よりも経済や国家の発展を前面に出したり…。発言や文章を注意深く見ると、本質がわかってくる。最近のマスコミに大きく取り上げられる否定論者のほとんどは、このたぐいである。

個人に対して窮屈な抑圧が増える中、環境について語ることに對し、拒絶反応が多くの人々の心の中に暗くよどみつつある。これが一気にヒステリックな『反環境』のうねりになる可能性は大きい。それを狙ってニセエコに人々を駆り立てている。

『真の環境派』たらんとする者は、二酸化炭素説や、個人の統制・抑制・抑圧に一刻も早く決別を告げ、本来の活動に力を注ぐべきであると思う。そうでなければ、彼らに葬り去られてしまうのだ。嘘をもとにして活動してはいけない。大量生産・大量廃棄の経済至上主義を守るため二酸化炭素説を否定するような人々に、流れをつくらせてはならない。本当の環境問題を追及する私たちこそが、嘘を暴いていかなければならないのだ。

公害被害者の救済さえ、50年たっても満足にできないこの国。被害者を踏み潰してきたシステムをこそ、追い詰めていくべきだ。ニセエコ商品をエコ替え(買え)と売りつける商魂のたくましさを、あなたは『偉い!』と褒め称えますか?

使えるものは使える限り使い倒すことが大事。そのほうが新しいものを作るよりもエネルギーは少ない。ゴミも減らせる。古い製品を禁止したり(白熱電球の製造を禁止するらしい)、使えなくしてしまう(地上アナログの廃止でそれまでのテレビはすべて使えなくなる)、今のあり方こそが、『反環境』ではないだろうか?

これまで嘘の二酸化炭素説やリサイクルの火消しに躍起となっていて、本当の環境問題を訴える余力がなくなってきていた。今回、リサイクルについて改めて問いかけるパネル、核施設の事故のパネル、テレビでセミパラチンスク核実験場の惨状を展示した。今一度、公害、核、という、本当の環境問題について、原点に帰って問いかけていきたいものである。

文責・北海道(E.H.)